

『源氏物語』「鈴虫」巻における女三宮考

——〈香染の扇〉の行方から——

杉浦 一彰

一、問題の所在

朱雀院は持病の進行に従い出家を意識するようになるが、鍾愛の娘である女三宮の将来を思うとなかなか踏み切れない。彼はその不安を拭うため、自分の代わりに娘の後見を託せる人物を捜す。しかし適任者はおらず、最終的には光源氏への降嫁という形で決着する。光源氏には年齢的な問題があり、最初その申し出に乗り気ではなかったが、度重なる要請や藤壺の係累という血筋に期待をかけて承諾する。ところが実際の女三宮はただ幼く、光源氏の淡い期待は立ち消えになる。

「若菜上」巻の前半の展開を辿ってみたが、女三宮の幼稚な人物像がそもそもその発端であり、その人物造型は物語の進行上必須の条件であったことがわかる。そのため先行研究では、極楽とまで言わしめた六条院世界に疑義を呈し崩壊に導く存在¹⁾、柏木の破滅や光源氏の凋落を決定づける存在²⁾、光源氏と紫の上の夫婦関係を相対化する存在³⁾などのように、人物造型の意義と物語の主題を関連付ける解釈が多い。女三宮の人物造型を単に欠点として捉えるのではなく、その意義を考究する試みがなされているのである。

ところで、女三宮はこうした人物造型が一貫するわけではない。彼女は成長・変貌⁴⁾する。特に、「鈴虫」巻はそれまでの

語られ方と著しく異なり、すでに異質性が指摘されている⁵。その理解は御帳台を舞台にした光源氏との贈答歌に起因するもので、「香染なる御扇」(④・三七六頁)⁶が媒介を果たしていることに気づく。

しかし主要な注釈書⁷では解釈上この〈扇〉を重要視していない。贈歌に込められた光源氏の心情を理解するためには、「香染なる御扇」に和歌が書写されたことを看過してはならないのではないか。本論では「鈴虫」巻において二組ある光源氏と女三宮の贈答歌のうち、御帳台を舞台とする前者の贈答歌を取りあげる。媒体となる〈香染の扇〉に積極的な意義を見出し、それは女三宮の人物造型にも深く関わることを指摘する。

二、女三宮の成長

まずは先行研究で指摘された「鈴虫」巻の女三宮の人物造型の異質性を確認するため、彼女の成長・変貌の過程を見ていく。女三宮には、「欠陥的な姫宮」像を造型するために、「あえか」「いはけなし」「幼し」「片なり」「ひはづ」「わかし」などの表現が多用されていた⁸。物語が展開するとそうした外見だけではなく彼女の内心も多く語られるようになる。その契機を柏木との密通事件(以下密通事件と称す)に求める解釈⁹、女三宮の母性の誕生に求める解釈¹⁰がある。ここでは密通事件を起点とし、それ以降の人物造型に関わる表現を中心に取り扱う。

さて、女三宮は密通事件発生直後からその発覚を恐れる心と柏木との関係を結んだ罪の意識に苦悩する。

深き心もおはせねど、ひたおもむきにももの怖ぢしたまへる御心に、ただ今しも人の見聞きついたらむやうにまばゆく
恥づかしく思さるれば、明かき所にだにえみざり出でたまはず。いと口惜しき身なりけりとみづから思し知るべし。

(若菜下・④・二二〇頁)

女三宮は「ひたおもむきにも怖ぢたまへる御心」がつき、「人の見聞きつけ」ることを恐れる。臙化された「人」という語りであるが、光源氏を意識していることは間違いない。取り返しのない事態に、女三宮は「いと口惜しき身なりけり」と憂愁を深める。ついに柏木からの「浅緑の薄様なる文」(若菜下・二五〇頁)によって密通事件の全容が光源氏に知られると、彼女が恐れていた事態が現実となる。光源氏は憎しみを隠し、「ありしながら見たてまつらんよ」(若菜下・二五三―二五四頁)と何事もないように振る舞うが、鬱積する種々の感情を抑えることなど出来るはずもなく、女三宮と柏木を破滅へと追いつめていく。¹¹⁾

進退窮まった女三宮は、現状から逃れるために次のような願いをもつ。

さのみこそは思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心つきぬ。

(柏木・④・三〇一頁)

女三宮は心身ともに極限状態に追い込まれるうちに蕙を出産する。柏木の子とすでに認知する光源氏は手放しでは喜べず、自然と対応がよそよそしくなる。確かな隔意を感じとつた女三宮は、「思し隔つることもまさらめ」と今後の結婚生活を悲観し、そうした関係に終止符を打つために、「尼にもな」る決意をする。信心が全くない出家願望は娘を思う朱雀院の手によって滞りなく達成される。しかし尼となつても女三宮は望んだ生活を迎えることはできなかった。

人々すべり隠れたるほどに、宮の御もとに寄りたまひて、「この人をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。

「誰が世にか種はまきしと人間ははいかが岩根の松はこたへむ

あはれなり」など忍びて聞こえたまふに、御答へもなうて、ひれ臥したまへり。

(柏木・④・三三四〜三三五頁)

薫の五十日の祝儀に関わる一場面である。祝儀が終わり周囲に人氣がなくなると、光源氏は女三宮に擦り寄り、「かかる人を棄てて」と薫に託けた恨み言を伝える。それに対し女三宮は「顔うち赤め」ることしかできない。彼女の消極的な対応を見た光源氏はさらに和歌で恨む。この和歌は、「梓弓いそべのこ松たが世にかよろづ世かねてたねをまきけむ」(古今集・雑歌上・九〇七・よみ人しらす)を踏まえたもので、(新大系)が指摘するように、「祝賀になつていない露骨な歌」(脚注一九・三二頁)である。光源氏は「誰が世にか種はまきし」と、心中に燃り続ける女三宮への恨み心を「忍びて聞こえるのであった。

辛辣な和歌を受けた女三宮は返歌できない。まるで一時の暴風雨が過ぎ去るのを耐えるかのように、彼女は「ひれ臥す。出家してもなお光源氏への恐怖心に縛られ、女三宮は和歌の贈答さえ満足にすることができないのである。

ところが、本稿で問題とする「鈴虫」巻の場面では、それまでの語られ方からは想像できない女三宮の対応が見える。

北の御障子もとり放ちて御簾かけたなり。そなたに人々は入れたまふ。しづめて、宮にも、ものの心知りたまふべき下形を聞こえ知らせたまふ、いとあはれに見ゆ。御座を譲りたまへる仏の御しつらひ見やりたまふも、さまざまに、「かかる方の御営みをも、もろともにいそがんものとは思ひよらざりしことなり。よし、後の世にだに、かの花の中の宿に隔てなくを思ほせ」とて、うち泣きたまひぬ。

はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき

と御硯にさし濡らして、香染なる御扇に書きつけたまへり。宮、

へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ

と書きたまへれば、「言ふかひなくも思ほし朽すかな」と、うち笑ひながら、なほあはれとものを思ほしたる御気色なり。
(鈴虫・④・三七六―三七七頁)

光源氏は絢爛豪華な法会の準備が一段落すると、法会の主役となる女三宮を訪れる。そこではおよそ彼の美意識からかけ離れた光景が広がっていた。「ことごとしく装束きたる女房」が「五六十人」(三七五頁)ほど集まり、さらに火取から立ち上る香が「けぶたきまであふぎ散ら」(同)される。盛夏の頃、女房の体臭と薫香が立ち籠める空間は想像を絶する。女三宮はというと何の手段も講せず、「人氣に圧されたまひて、いと小さくをかしげにてひれ臥」(三七六頁)していた。

光源氏はあまりの光景に辟易しながらも、女三宮と落ち着いて話せる環境を整える。女房の施した過剰な演出を戒め、場に滞留する暑気を払い、邪魔な「人々は入れ」る。そこからは光源氏の目指す「聖なる空間」¹³⁾がここにも維持されるように努める姿勢が見られるが、同時に彼の女三宮に対する細やかな心遣いも看取される。

光源氏は部屋の設定だけでなく法会が滞りなく進むよう女三宮に「下形」を教える。密通事件の舞台となった「御座」を見ても彼は女三宮への怒りや妬みを吐露せず、穏やかな心で「さまざま」な思いを語りかけている。女三宮はそれに對し、「ひれ臥し」て無視するような対応はしない。語りかけに応じる姿からは、先行研究で指摘された女三宮の成長が認められる。

しかしながら、こうした女三宮の人物造型を単に成長と片づけたのではその異質性が明らかとならない。以下、贈答歌の表現を辿り、そこに込められた両者の心情を読み解いていきたい。

三、光源氏の贈歌——「香染なる御扇」に込められる再会の思い

光源氏の和歌の表現やその媒体となる扇から、「さまざま」としか語られない心情を汲み取る。そして先行研究ではあまり顧みられなかった「香染なる御扇」と和歌との関係性を捉え直す。光源氏の和歌を再掲する。

はちす葉をおなじ台と契りおきて露のわかるる今日ぞ悲しき

と御硯にさし濡らして、香染なる御扇に書きつけたまへり。

展開の順序からすれば逆転するが、まず先に筆跡の表現から見ていこう。「鈴虫」巻は先行する場面で、光源氏の書写した女三宮の「御持経」(三七四頁)が人々を驚かせた様子を語る。光源氏は「罝かけたる金の筋よりも、墨つきの上に輝」(三七四～三七五頁)くようにも書けるのに、あえて、「御硯にさし濡らして」和歌を書写するのである。この行為は、「源氏物語」では「初音」巻にいま一例あるのみで(③・一五〇頁)、主要な注釈書も積極的な意義を見出してはいない。しかし和歌との関係に重点を置くと、看過してはならないことがわかる。

光源氏の和歌には「露」が詠み込まれる。「露」は和歌に詠み込まれる場合しばしば涙の喩となる。水気を多く含んだ筆は「露」を連想させる。つまり深い「悲し」みを表現するために「御硯にさし濡らして」いるのである。このように筆跡でさえ光源氏の心情を補強する働きをしており、和歌の媒体となる「香染なる御扇」にも含意があると見るべきである。注釈書では〈集成〉の「丁子を濃く煎じた汁で染めたもの。薄紅で黄色を帯びる。丁子染ともいう。尼の持ち物である」

(頭注五・三四八頁)のような解釈にとどまる。基本的な語釈に留まり、媒体となる意義には言及されなかったのである。

だが光源氏が偶然手に取った扇に和歌を書写したという理解ではいかにも不適當である。

光源氏が扇に和歌を書写する意義、それが「香染」であることを検討する必要がある。

まずは贈歌の際、扇が媒体となる意義から検討する。この行為は、たとえば八代集では、『後撰和歌集』に七例、『拾遺和歌集』に四例、『後拾遺和歌集』に四例、『金葉和歌集』に一例、『新古今和歌集』に三例確認される。その中でも『後拾遺和歌集』に所収する次の和歌に注目したい。

ゐなかへまかりける人に、かはぎぬ、あふぎつかはずとて

よのつねにおもふわかれのたびならば心みえなるたむけせましや

(巻八・別・四六七・藤原長能)

地方に下る人の「たむけ」として「かはぎぬ」とともに「あふぎ」が贈られる。(新大系¹⁶)によると、「かはぎぬ」に「彼(か)は来ぬ」が掛けられ、「あふぎ」には「逢ふ」が掛けられているという。「ゐなか」に旅立つ人へ餞別として贈られる扇には、「扇(あふぎ)＝逢ふ」の連想からその人との再会を祈念する意味あいが見込まれていたのである。その一方で大谷雅夫は「夕顔」巻にある次の場面を端緒にして、扇に「逢ふ」の意を重ねることに疑義を示す。¹⁷

こまやかにをかしきさまなる櫛、扇多くして、幣などわざとがましくて、かの小桂も遣はず。

逢ふまでの形見ばかりと見しほどにひたすら袖の朽ちにけるかな

(①・一九四～一九五頁)

空蝉が夫の任国へ下る際、光源氏から私的な餞別の品を贈られる場面である。そこで詠まれた光源氏の和歌には、「逢ふまでの形見」という表現がある。これは「扇」ではなく、「かの小桂」に寄せられた表現である。だがここで注意したいの

は、広義の離別という点では共通してもこの場面と「鈴虫」巻の場面を同一に扱えない点である。

両場面の状況を子細に見ると異同があり、扇を贈る行為にもそれぞれに固有の意義があると考えられる。留意したいのは、「香染なる御扇」と語られる点である。「源氏物語」ではいま一例、薫の〈香染めの扇〉が見られる（宿木・⑤・四二三頁）。そこでは薫の「移り香」と「丁子」の香が相まって「たとへん方な」い香りを放つ様子が語られる。しかし「鈴虫」巻の場合、特に「香染なる御扇」の香りに関する言及はなく、他の意義があつたと考えざるを得ない。

『源氏物語』と同時代作品に視野を広げると、『枕草子』に一例認められた。

松の木立高き所の、東南の格子上げわたしたれば、涼しげに透きて見ゆる母屋に、四尺の几帳立てて、その前に円座置きて、四十ばかりの僧の、いと清げなる、墨染の衣、薄物の袈裟、あざやかに装束きて、香染の扇を使ひ、せめて陀羅尼をよみあたり。

（四六〇頁）¹⁸

『枕草子』には扇（二六七・二六八段など）に言及する章段があり、清少納言の扇への興味と当時の使用習慣が垣間見える。引用した用例では、「香染の扇」を使い陀羅尼を読む「四十ばかりの僧」が登場する。扇の色彩にまで叙述が及んでおり、当時の習慣として、「香染の扇」は出家者の持ち物とされていたことがわかる。前に挙げた〈集成〉も指摘しているが、「香染なる御扇」と語られることによつて尼である女三宮の持ち物として印象付けられるのである。

その場合、光源氏は意図的に女三宮の「扇」に和歌を書き付けたことになるが、それは特殊な行為であつた。

① ありつる扇御覧ずれば、もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて、をかうすさび書きたり。

心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花

（夕顔・①・一三九〜一四〇頁）

② よしある扇の端を折りて、

「はかなしや人のかざせるあふひゆえ神のゆるしの今日を待ちける

注連の内には」とある手を思し出づれば、かの典侍なりけり。

(葵・②・二九頁)

③ 例の宵の御行ひに、御手水まるらする中将の君の扇に、

君恋ふる涙は際もなきものを今日をば何の果てといふらん

(幻・④・五四四頁)

①②③は、和歌の媒体となる扇が登場する箇所である。扇の所有者は、①は夕顔、②は源典侍、③は中将の君であり、和歌を詠作した人物と扇の所有者が一致するのである。「鈴虫」巻の場合、光源氏は自分の扇ではなく、あえて女三宮の「香染なる御扇」に書きつける。そのため彼の贈歌は出家者の扇に記されることに意義があつたことがわかる。

「鈴虫」巻に戻る。光源氏の和歌には「はちす葉」が、女三宮の返歌には「はちすの宿」が詠み込まれ、この贈答で中心的な歌材をはたしている。蓮は和歌に詠まれる場合は多く阿弥陀仏の浄土、すなわち極楽浄土の比喩となる。¹⁹『源氏物語』には、「蓮」(八例)、「蓮の上」(一例)、「蓮の上の露の願い」(一例)、「蓮の座」(一例)、「蓮の中の世界」(一例)、「蓮の花」(三例)、「蓮の宿」(一例)、「蓮葉」(二例)の用語例がある。²⁰夏の景物や薫香などその使用は多岐に及ぶが、贈歌の直前にある光源氏の「よし、後の世にだに、かの花の中の宿に隔てなくを思ほせ」という発言に注目すれば、その意味は明らかである。「はちす葉」には女三宮との来世も変わらぬ夫婦の一蓮托生の意味が込められるのである。²¹

ところで、「はちす葉」と「露」さらに「お(置)きて」は縁語関係が認められる。一方、「香染なる御扇」と結びつく語句は見受けられない。八代集に視野を広げても、「扇」と「蓮」・「露」・「置く」が有機的に結びつく和歌は見出せず、唯一、「和漢朗詠集」に「扇」と「蓮」の形状の相似を詠った例が認められるのみである。²²だが、ここで「はちす葉をおなじ台」という表現に留意すると、出家者の持ち物「香染なる御扇」との関係性に気づく。出家者の目指す極楽世界という連

想で「香染なる御扇」と和歌は結ばれているのである。

光源氏の和歌には、「露」や「わかるる今日ぞ悲しき」が詠み込まれ、〈新編全集〉の指摘のように、「宮への愛執と執着の情」（頭注・三七七頁）がある一面では読み取れる。しかし、「後の世」の関係に言及する発言や和歌の「はちす葉をおなじ台」という表現からは、光源氏の意識がすでに来世の「契り」へと転化されていることがわかる。密通事件によつて夫婦関係が破綻した現世の生活には「執着」せず、来世での再会を希求しているのである。

そうした光源氏の心情を考慮すれば、「香染なる御扇」を和歌の媒体とした理由も明らかとなる。餞別の際に贈られる「扇」には、「逢ふ」との連想から相手に再会を意識させる。光源氏は出家者の「香染なる御扇」に和歌を書き付けることで、女三宮に来世も変わらぬ「契り」を訴えたのである。

「鈴虫」巻では冒頭から女三宮のために心を砕く光源氏の様子が語られる。そうした行動やこの和歌の性格を見る限り、「さまざま」と臚化された彼の心中に女三宮への怒りや執心の情がないことは明らかである。むしろ、「扇」を媒介としたことから女三宮の出家を追認する気持ちがかがえるのである。

四、女三宮の返歌——消えた「香染なる御扇」

来世での再会を望む光源氏の思いは女三宮に届いたのか。光源氏の贈歌やその媒体となつた「香染なる御扇」の影響について検討し、女三宮が返歌を詠作した理由を明らかにする。女三宮の返歌を再掲する。

へだてなくはちすの宿を契りても君が心やすまじとすらむ

と書きたまへれば、……

前節で確認したように女三宮は光源氏を恐れるあまり、彼から「忍び聞こえ」(柏木・三三四頁)られても返歌できなかった。こうした強い忌避意識を念頭に置くと、女三宮が「ひれ臥し贈歌を無視する可能性が充分にあった。しかし実際には、「書きたまへれば」とあるように、光源氏から贈られた「香染なる御扇」に返歌を書き付ける。彼女の成長が確認される対応であるが、同時に光源氏から贈られた「香染なる御扇」が詠作の契機となっていることがわかる。つまり和歌の媒体として扇が存在したため、女三宮は返歌をするのである。男女間で扇の贈答がなされる意義に目を向ける必要がある。平安期における扇の贈答を検討した南波浩によると、その行為には次のような意義があるという。

平安朝においては、扇を他者に贈ることによって、相手のタマ(生命力)を振り立たせ、あるいは邪気を払い、その息災を祈念する「タマフリ」の観念と、扇の贈受を不吉として忌む「タブー」の観念と、すなわち、相反異質の観念の並存という、アンビヴァレンス(両義性)を、「扇」は含有することになった。²³⁾

前者の「タマフリ」の観念は、受取手の感情を昂揚させる呪術的な行為である。たとえば、「花宴」巻で逢瀬を迎えた光源氏と朧月夜がその翌日「扇ばかりをしるしに取りかへ」(①・三五八頁)たのは、共寝の「しるし」として互いの愛情を奮い立たせようとしたためである。後者の忌避観念は、「袖中抄」の「あふぎゆ、し」の項目などに認められるものである²⁴⁾が、これは「班婕妤の故事」²⁵⁾が源泉となる考え方である。「東屋」巻の「扇の色も心おきつべき閨のいにしへ」(⑥・一〇一頁)という表現にも影響が見られる。以下、女三宮の和歌を手掛かりにこれらの影響について考察する。

女三宮の和歌には、「ゆゆし」などの表現はない。和歌には、「はちすの宿」「契り」と光源氏の贈歌と共通する語句が用られ、贈答歌の呼吸が途切れないうち整えられている。技法面では、「すまじ」に「住まじ」と「澄まじ」を掛けて重層的な表現を生み出している。そのため光源氏の贈歌と異なり、「源の心は此世にとめ給へしと云くたし給也」²⁶⁾や、「同座はあ

れとも今生にてさへ隔心あればとの事也⁽²⁾のような解釈を生むことになる。このように、〈玉上評釈〉の指摘した「いわけなさを脱け出て、大人らしくなった落ち着き」(二三六頁)は確認されるだが、扇の贈答に関わる「両義性」が女三宮にいかん作用したかは不分明である。和歌の表層的な部分に表れない影響に目を向ける必要がある。

女三宮の和歌全体の雰囲気は、光源氏の「契り」を否定する基調で貫かれている。これは、女三宮がそれまで光源氏に決して口にできなかった感情である。密通事件発覚後、女三宮は光源氏との関係に「へだて」を感じていたが、素直に感情を吐露することはなかった。光源氏との交渉において女三宮は「ひれ臥し」感情を隠蔽していたのである。

この和歌では光源氏に憚ることなく、彼への不満を直情的に訴える。「香染なる御扇」を渡されたことによる「タマフリ」の影響を見るべきである。女三宮の手に扇が存在したため鬱積した感情は表出することになるのである。

さて、女三宮の和歌で贈答が一応の結末を迎えると、「言ふかひなくも思ほし朽すかな」と、うち笑ひながら、なほあはれどものを思ほしたる御気色なり」という光源氏の感懐が語られるのみで、「香染なる御扇」の行方は消される。この意義について検討を加え、改めて女三宮の和歌の性格を捉え直す。

「香染なる御扇」の行方は予想の域を出ないが、次の三通り考えられる。

- (一) 扇は女三宮の返歌とともに光源氏の手元に移る。
- (二) 扇は本来の所有者である女三宮の手元に残る。
- (三) 扇は毀損状態が進んだため捨てられた。

このうち、(一)は贈答の呼吸を考慮すれば一番可能性が高い。(二)は光源氏の行動に本来の所有者へ返す目的があったのならば可能性がある。(三)は光源氏の贈答が「さし濡ら」された筆で書かれ、さらに女三宮の返歌が「書き」そえら

れた点に注目すれば導き出せる。このようにいくらでも想像できるが、その行方が消された点に注目したい。役目を終え、物語上から捨てられた扇は、〈班婕妤の故事〉と響き合うのである。相手の寵愛が途絶えることを絶唱した「怨歌行」には「弃捐篋笥中」 恩情中道絶」という一節がある。つまり捨てられる扇は男女の関係の断絶を暗示するのである。

女三宮の返歌では「契り」の否定など光源氏との意識のずれが如実に表れている。光源氏は「扇」に托して来世での再会を詠いかける。女三宮は「扇」に込められた真意を汲み取れず、ただ和歌の技巧的な面のみで逆襲する。光源氏にはいまだに「へだて」があると邪推する女三宮には、「扇」と「はちすの宿を契り」との関わりを理解できなかった。光源氏との「契り」をただ否定する女三宮の姿からは、男の真意を読みとれない幼さが露呈されるのである。贈答の後、光源氏は「うち笑ひながら、なほあはれ」を覚える。それは扇に凝縮した思いが女三宮に届かなかったことを知り思わず漏れた嘆息である。

「扇」は女三宮の心中にある光源氏への不満を表出させる契機を作った。その反面、贈答で明らかとなったのは埋まらない夫婦の距離感である。女三宮はその直情的な返歌によっていまだに幼稚な対応しかとれぬことをさらけ出してしまっている。

五、まとめ

「鈴虫」巻の御帳台を舞台とする光源氏と女三宮の贈答歌を中心に考察してきた。その後の展開を辿り、扇の贈答が与えた両者への影響を確認して論を閉じる。

女三宮から返歌を受けた光源氏はその後、「今しも心苦しき御心添ひて、はかりもなくかしづききこえたまふ」(三七八頁)ようになる。そこには老い衰えた光源氏の醜さが認められるのかもしれない⁽²⁾。しかし光源氏は女三宮に経済的な支援

をしながらも、彼女に同居を強要してはいない(三七九頁)。そのため光源氏の気持ちは現世の生活よりも、来世での生活に向けられていることが確認される。それに対し女三宮は光源氏の行動の真意を汲み取れない。繰り返される手厚い支援にも、その背後に光源氏の〈好き心〉を幻視し、「例の御心はあるまじきことにこそはあなれ」(三八〇頁)と思うのであった。贈答歌で見られた、両者の溝は結局埋まることはなかったのである。

贈答歌の解釈から「鈴虫」巻の女三宮の特異な人物造型が先行研究で指摘されてきたのだが、それには和歌の媒体となる「香染なる御扇」の存在が何より大きい。「香染なる御扇」は女三宮の気持ちを表出させる契機となり、同時に光源氏の真意を読み取れない幼稚さもあぶり出す。消された〈扇〉の行方は、この夫婦関係が〈あふぎゆゆし〉の結末を迎えたことを意味するのである。

注

- (1) 山田利博「負性を帯びた主人公——女三の宮の造型をめぐって——」(早稲田大学大学院中古文学研究会編「源氏物語と平安文学 第三集」、一九九三年)、山本高子「源氏物語論——女三の宮をめぐって——」(「学習院大學國語國文學会誌」四八、二〇〇五年三月)など。
- (2) 深沢三千男「女三宮物語の基本構造」(「源氏物語の形成」桜楓社、一九七二年)、柳町時敏「柏木と女三の宮——藤壺事件応報の深度——」(「常葉国文」二七、二〇〇三年三月)など。
- (3) 豊島秀範「絶対的存在の欠落——女三宮登場の意味——」(「弘学大語文」一六、一九九〇年三月)、森田衣世「紫の上と女三の宮」(「樟蔭国文学」四二、二〇〇五年一月)など。
- (4) 榎本正純「女三の宮致——物語と作者(下)——」(「武庫川国文」三三、一九八八年一月)、三村友希「女三の宮の恋——もう一人の〈紫の上〉の行方——」(「跡見学園女子大学国文学科報」二六、一九九八年三月)、池内千絵「女三宮の心情とその形象」(「愛文」三九、二〇〇四年三月)など。

- (5) 池田節子「女三の宮」(今井卓爾ほか編)「物語を織りなす人々」勉誠社、一九九一年
- (6) 「源氏物語」の本文は、秋山虔ほか校注・訳「新編日本古典文学全集」小学館、一九九四年(一九九八年に拠り、私に適宜傍線などを附し、引用末尾に巻名・分冊数・頁数を記す。解釈を引用する際は、〈新編全集〉と略記する。
- (7) 参考とした「新編日本古典文学全集」を除く注釈書を左記する。
- ↳玉上評釈↳玉上琢彌「源氏物語評釈 第八卷」角川書店、一九六七年
- ↳集成 ↳石田穰二ほか校注「源氏物語 五」(新潮日本古典集成四〇)新潮社、一九八〇年
- ↳新大系 ↳柳井滋ほか校注「源氏物語 四」(新日本古典文学大系二二)岩波書店、一九九六年
- (8) 前記(4) 榎本正純論文。
- (9) 松田薫「源氏物語」にみる、物語の論理——女三宮造型の意義をめぐって——(「同志社国文学」二八、一九八六年二月)、前記(4)三村友希論文。
- (10) 沢田正子「源氏物語の母」(源氏物語探求会編「源氏物語の探求 第六輯」風間書房、一九八一年)
- (11) 前記(2) 深沢三千男論文。
- (12) 特に注記のない和歌引用はすべて「新編国歌大観」編集委員会監修「新編国歌大観CD-ROM版」に拠る。
- (13) 山口量子「鈴虫巻女三宮持仏開眼供養の位相——方法としての〈モノ〉——」(「玉藻」二七、一九九一年一〇月)
- (14) 渡部泰明「露」(久保田淳ほか編「歌ことは歌枕大辞典」角川書店、一九九九年)
- (15) 詞書や和歌で「扇」が詠み込まれた用例を検索したが、扇合などの用例は除外し、扇を人に贈った用例のみ数える。
- (16) 久保田淳ほか校注「後拾遺和歌集」(新日本古典文学大系八)岩波書店、一九九四年
- (17) 大谷雅夫「饑別の扇——歌語と詩語——」(「国語国文」六四—三、一九九五年三月)
- (18) 松尾聰ほか校注・訳「枕草子」(新編日本古典文学全集一八)小学館、一九九七年
- (19) 片桐洋一編「歌枕歌ことば辞典」角川書店、一九八三年
- (20) 池田亀鑑編「源氏物語大成 卷四」中央公論社、一九五三年
- (21) 「河海抄」が早く「一々池中花尽滿花々惣是往生人各留半座乘花葉待我闊浮同行人」と一蓮托生を指摘した。

(22) 形状の相似が詠われる用例である。

煙は翠扇を開く清風の暁

水は紅衣を泛ぶ白露の秋(夏) 蓮・一七七・許渾(菅野禮行校注・訳「新編日本古典文学全集一九」小学館、一九九九年)

(23) 南波浩「平安朝文学における『扇』をめぐる問題」(『叙説』一九七九年一〇月)

(24) 川村見生「歌論歌学集成 第五卷」三弥井書店、二〇〇〇年

(25) 〈班婕妤の故事〉とは漢の成帝から帝寵を一身に受けていた班婕妤がその愛情を趙飛燕に奪われ歎くものである。『文選』「怨

歌行」で有名である。参考として、「怨歌行」を記載する。

新裂三齊紈素一 皎潔如三霜雪一

裁爲三合歡扇一 團圓似三明月一

出三入君懷袖一 動搖微風發

常恐秋節至 涼風奪三炎熱一

弃三捐篋筒中一 恩情中道絶 (内田泉之助ほか校注・訳「文選(詩篇)下」明治書院、一九六四年一二月)

(26) 伊井春樹編「内閣文庫本 細流抄」桜楓社、一九七五年

(27) 野村精一「孟津抄 中卷」(源氏物語古注集成 卷五)桜楓社、一九八一年

(28) 増田繁夫「鈴虫巻の世界」(秋山虔ほか編「講座源氏物語の世界 第七集」有斐閣、一九八二年)

(博士後期課程一年)